

歴史的建築様式を用いて現代住宅を デザインする方法論の研究

竹 山 清 明

1. はじめに

古来、住宅は、立地する地域の特性になじみながら、各時代の社会の文化の流れや発展の中で、特徴のある魅力的な形象を与えられてきた。そのような形象は多くの場合、歴史的に継承されて来た。新しいものは古いものを受け継ぎながら少しずつ変化しつつ形づくられ、変化が過去のものとはっきり識別できるほど明確になった場合、新しい建築様式として認識されることになったのであろう。このように20世紀に入りモダニズム様式が現れるまでは、住宅の内外部のデザインは、過去の様式をモデルにしながら形づくられてきた。

しかし現代の建築家が用いるモダニズム建築デザインは、それ以前の過去の様式に範を求めるといった設計の方法を否定したものである。現代住宅のデザインは、歴史的建築のような装飾などの文化的情報を取り去り、プロポーションや、吹抜などの空間の高揚感、ディテールやデザインを可能な限り単純化するミニマリズム、独自性の強い計画やデザインを追求するコンセプトチャリズムなどにより、成り立っている。そのためデザイン的には、普通の市民にとって感情移入がしにくく単調に感じられるものになりがちである。そのようなことから、一般に市民は、建築家が好むモダニズムデザインやその後継者である現代建築デザインを好まない⁽¹⁾。また通常、現代建築デザインの建物は、その簡略化されたディテールにより新築の時が一番美しいようにつくられている。歴史的建築のように古くなれば風格が出て人々の評価が高まるというような質を欠いているのが一般的である。

またモダニズム建築デザインには元来街並みを形成する思想にも欠ける。モダニズム建築のバイブル的文書である CIAM のラ・サラ宣言⁽²⁾ (1928)には「都市計画は、決して美学的思慮によって決められるものではない。それは、もっぱら機能的な推論によって決められるものである」とある。これは、ルネッサンス以降、伝統的に行われてきた、街並み景観を意識して各々の建物を美しくデザインするという社会ルールを守らず、経済的な効率を優先し建築と都市をつくるとの意思表示である。実際、新建築誌などの建築写真マガジンに載せられている有名建築家らによる現代建築や住宅は、単独の敷地内で完結する建物の独自性の強いデザインが強調されているのみで、街並み形成の配慮はほとんど無い。

さらに私たちの身の回りに普通に大量に存在する「大衆化したモダニズム建築」⁽³⁾は、経済

効率を第一に設計されており、安物で建設はしやすいが美しくはなく、かえって街並みを混乱させている⁽⁴⁾。このようなわが国などのモダニズム建築やその後継者である現代建築のデザインやそれらにより形成される街並みを考えると、上記のラ・サラ宣言の意思表示が見事に現実のものになっていることがわかる。

以上のようなことから、これからの日本の質の高い住宅地景観形成を考える上で、モダニズムデザインの思想には、街並みを美しく形成しようという質が欠けていることは明白である。さらに、美しい建築デザインの創造という点でも、先に述べたように普通の市民に強く支持されるデザインを創りだし得ていないのも明らかである。

これからの主要に用いられる建築デザインのあり方を考えるとき、以上のような欠陥を持つモダニズムデザインおよびその後継者である現代建築デザインのみを基礎に考えては、望ましい住宅デザインのあり方を探ることには実りが少ないと考えられる。

現代およびそれを敷衍した近未来の現代建築デザイン(モダニズム)に有効性が期待できないとすれば、逆に少し時代を遡り、モダニズムの成立以前のプレモダニズムなどの建築デザインのところから、これからの望ましい建築デザインの探索をやりなおすしか方法は無いであろう。

モダニズム建築デザインであってもプレモダンのそれであっても、主にそのような変革の取り組みが先進的に行われた地域は西ヨーロッパであって、それに少し遅れて、アメリカや日本で取り組みが行われた。ということから西ヨーロッパのプレモダニズムなどの歴史的な建築様式をベースに、わが国のこれからの望ましい住宅建築デザインのあり方に検討を加える。

その場合、西洋風の装飾のはなはだしいルネッサンス建築様式やバロック様式などは、一般の日本人の考える我が家のスタイルには不適合であろうと思われる。もう少し装飾が少ないか、シンプルなデザインであれば矛盾が少ないものと思われるのであるが。

和風住宅の様式も、アンケート被験者の年齢が若くなれば古くさいと評価が低い⁽⁵⁾。ハウスメーカーが全国展開している住宅公園でも、和風デザインのモデルハウスは極めて少ない。和風デザインの住宅の売上げがはかばかしくないため、ハウスメーカーは和風デザインの住宅の販売には積極的でないように判断される。これは上記の、和風があまり好まれないとの調査結果と類似の傾向である。その意味では、これまでの一般的な和風住宅の様式のままではなく、若い人などを中心に好まれるような和風のデザインの改善が必要であることを示す。

以上のようなことから、わが国の一般の人々の評価の高い西洋民家様式⁽⁶⁾の中から、適用できる様式を見つけ参考にしたい。その中でも評価が高いプレモダン様式のアーツ&クラフツ様式⁽⁷⁾をデザインソースとして、日本の新しい住宅デザインに用いる方法を考えてみる。アーツ&クラフツ様式の重要なデザインソースとして、イギリス中部のコッツウォルド地方の民家デザインとそれらによる街並みがある。この地方の魅力は民家とそれらにより形成される街並みであるが、毎年数多くの日本人観光客がそれらをおもてなしコッツウォルドを訪れる。写真1はアーツ&クラフツ運動の旗手ウィリアム・モリスがイギリス一美しい村と激賞したバイブリーのアーリントン・ローの街並み景観である。14世紀末の建設であるが、今はナショナルトラス

トの所有となり美しく維持・活用されている。天然スレートの急傾斜の屋根、縦長の窓、ラフな風合いの外壁仕上げ、美しいプロポーション、人間的なスケールとイメージなどが、この民家デザインの魅力であろう。多くのイギリス人が好み、少なくとも日本人も好むこのようなデザインは、中世にデザインされたもの



写真1 バイブリーのアーリントン・ローの街並み景観

としても現代的価値を持つものと思われる。このようなデザインや、その延長線上にあるアーツ&クラフツ様式のデザインを現代住宅に適用する方法を考えてみたい。このようなデザインのコピーは、通常は感覚・センスだけにたより恣意的に行われる。センスが良ければ、元のデザインの本質を掴み、質の高い造形の達成が出来るかもしれない。しかしセンスだけでは歴史的様式が持つ本質的なあり方を踏み外してしまうかもしれない。この研究では、具体的な創作事例をもとに、そのようなデザインの基本的・原則的なあり方を探求してみたい。

そもそも、アーツ&クラフツ様式のようなプレモダン様式の建築デザインは、ヨーロッパが発祥地であるが、同時代に都市の近代化を図りつつあったアメリカや日本にとっても、他人事では無かった。日本では20世紀前半に柳宗悦らによってアーツ&クラフツに賛同する民芸運動が興され、様々な実用品などの造形を展開した。また分離派などの建築デザイン運動も興った。このようにアーツ&クラフツデザインやその時代にヨーロッパで展開されたアールデコやゼセッションなどのプレモダンのデザイン運動は、欧・米・日などで同時並行的に展開されたのである。その現代的なあり方を、現在の日本で探求することには、大いなる必然性があると判断される。

需要者の要求に敏感なハウスメーカーは、好まれる比率の高い西洋民家風のデザインを取り入れた商品の販売を行うところが多い。しかし歴史的な建築様式の無理解と基本的なデザイン力の不足から、居住する家族が代替わりした後も新しい世代や家族から愛され長く住み続けられる質⁽⁸⁾や、街並み景観を美しく形成できるデザインの質を欠いている場合が多いように見受けられる。

現在も戸建て住宅の新規供給では最も比率の高い町場の工務店や大工の設計する住宅は、もともとは和風の伝統的なスタイルを採っていた。しかし、昨今の都市住民の洋風民家風のデザインの好みに対応するため、そのような様式を真似したデザインのものが多い。ただし町場の工務店や大工は、通常は洋風民家のデザインソースを持ち合わせていないため、あるいは欧米の民家の直接的なデザインデータを持ち合わせていないため、デザインの規範は競争相手であるハウスメーカーのそれに習うことが多いものと推測される。こうして、ただでさえデザインの

な逸脱の多いハウスメーカーの洋風民家デザインは、一層混乱した形で工務店や大工に真似され世に出ることになる。

これらの、ハウスメーカーによる住宅デザインや工務店・大工らによる住宅デザインの改善も、大きな社会的問題である。この研究がこれらの住宅供給者に何らかの意味がある影響を与えうる水準に達することも本研究の一つの課題と考えて、研究を進めたい。

2. 先行研究など

日本では第二次大戦以降は、過去の様式に依拠せず自分のセンスで新しい造形を創り出すことを至当とする建築デザインのあり方が、大学などの教育の場でも、実際の設計の場でも、「正統」であたりまえのものとなった。歴史的な建築様式を、建築歴史学の立場においては、現実に適応するために学ぶべきものとしては取り扱わず、現実とは切り離された過去の遺産として建築考古学の対象として取り扱っている。本研究のように、過去の様式を現代建築デザインに導入するための創作論的な理論的検討はなされていない。

欧米でも最近では、ビル建築はモダニズム建築デザインを用いるのが当たり前のようである。モダニズム建築デザインが定式化される直前の1920～1940年代に建設されたパリやウィーンなどの集合住宅は、ルネッサンス様式かプレモダン様式で建てられたものが多いが、最近の新市街で建てられるものはモダニズム建築様式で建てられることが多い。

一方住宅については、伝統的な空間のつくり方が望まれているようで、日本のような四角いモダニズム様式のプレハブ住宅や疑似西洋民家風住宅が混在する住宅地はほとんど見られない。ほとんどの住宅地は新しいものであっても、伝統的な様式でつくられお互いにバランスの取れたデザインで街並みが形成されている。

アメリカの一般市民向けの住宅の本を見てみると、そのほとんどが住宅の建築様式の解説本である。自分がこれからつくる住宅はどのような建築様式を採用すれば良いかの基礎知識とデザインのイメージを学ぶ内容となっている。このような啓蒙の意味と、設計専門家が建築様式を学ぶために研究・出版された図書がある。ジョン・ミルズ・ベーカー著で戸谷英世訳の「アメリカン・ハウス・スタイル」⁽⁹⁾という題名を持つ。この本においてベーカーは、コロニアル様式からインターナショナル様式・ライト様式に至る41種類の建築様式を分類して取り上げている。これらの様式は、移民国家であるアメリカに各国から移ってきた人々が、自分たちの母国から持ってきた建築様式を、アメリカの地に根を下ろさせ花ひらかせたものである。現在も住宅を新築する場合はこれらの歴史的様式に基づいて建てられることが好まれ、四角いインターナショナル様式などでつくられる住宅の評価は、市民の間では低い⁽¹⁰⁾。

ベーカーは、この本の中で、四角い一般的な平面計画を設定し、ほぼ同一の間取りに、メインファサード⁽¹¹⁾のみであるが41種類の建築様式をかぶせる作業を行った。この作業の結果を見てわかることは、平凡な四角い間取りであっても、様々な魅力的なファサードデザインが創

出できるということである。美しい住宅の外部デザインを創り出す上で、歴史的な建築様式は絶大な威力を発揮することをベーカーは証明したのである。

ただしこの研究でベーカーの行った作業は、各様式の丸写しが基本である。移民した人々が自分たちのアイデンティティとして丸ごとそれらの様式を用いることには違和感が少ないであろう。しかし異なる建築文化の歴史を持つ日本では、そのまま丸ごとコピーするには矛盾が大きいの。日本の過去から現代に到るデザインのあり方や、人々のデザインセンスとの摺り合わせが必要である。そのためには、建築様式の内部外部のデザイン要素の分類・分析と、総合的な組み合わせのあり方の検討が必要である。本研究では、そのような点に重点を置いて、西洋の歴史的様式をわが国の現代住宅デザインに取り入れる方策を具体的に研究する。また、ベーカーの研究では、本研究の主題としているアーツ&クラフツ様式が取り上げられていない。時代的な関連性からいえばクラフツマン様式⁽¹²⁾が近似のものであるが、ここに示されているものは、グリーン&グリーンによるアメリカらしい重厚な様式であり、筆者が取り上げたいと考えているイギリス的なスマートなアーツ&クラフツ様式とは見え方はかなり異なる。むしろ「はじめに」でも述べたように、コッツウォルドの民家に類似のコロニアル様式⁽¹³⁾のスタイルが、アーツ&クラフツ様式に近いと言える。これらの様式を参考にもしながら、プレモダン様式のアーツ&クラフツ様式の分析・応用を進めたい。

もう一例参考にしたいのは、イギリスとアメリカ研究者が共同で著した「様式の要素」⁽¹⁴⁾である。この本はA4版561頁の大部の中に、「チューダー・ジャコビアン」から「アメリカン・バナキュラー」までの18の建築様式が、実際の建築の設計に応用できる目的で、周到に解説されている。そして、記載されている18の建築様式の一つに、アーツ&クラフツ様式も含まれている⁽¹⁵⁾。しかしこの本の主たる内容は、玄関扉、窓の建具、内装の壁・天井・床・階段、暖炉、造り付け家具・照明器具などのインテリアに関するもので、外部デザインについては簡単な概説があるのみである。今回の研究では、この本で扱われていない外部デザインを中心に、現代日本の住宅にアーツ&クラフツ様式の魅力を反映させる具体的あり方について、探求を行いたい。

3. 研究の方法

建築分野でいえば、構造や熱環境工学のような実験による客観的なデータに基づく研究や統計処理による分析等などという理科系の方法がある。建築計画分野では、文献データを深く読み込むことやアンケート調査・ヒヤリングなどを複合的に用いて客観性に近づこうとする研究スタイルを取る。これも社会的に存在するであろう客観的な何らかの真実に少しでも近づこうとする方法論である。

ところで、この研究は具体的なデザインの実践のための研究である。一つの規範として取り上げるアーツ&クラフツ様式デザインの住宅は、イギリスなどにそれなりの数が存在する。

アーツ&クラフツ様式の学問的研究であれば、データを網羅的に集め、その全体像をあきらかにすることが課題になる。あるいは一人の建築家の生涯を追い、社会的背景や作品の傾向の分析などをあきらかにすることで一つの研究的達成に至ることが出来るであろう。

しかしこの研究の目的は、既存のアーツ&クラフツ様式を一つの参考にしつつ、現代の日本のまちづくりに資する住宅デザインのあり方や、日本人のセンスに適合した空間造形のあり方を探ることにある。すなわち、厳密にはいまだこの世に存在しない建築デザインのあり方を追求することが目的である。このため一般的な研究スタイルである「存在するであろう客観的な真実」を探ろうとする方法論を採ることが出来ない。

この研究では、アーツ&クラフツ様式の様々な要素やその構成方法を元に、スケッチなどをおこし、それを設計者の立場・感性に基づき評価を行う。評価の基準は、アーツ&クラフツ様式の特徴や魅力を、日本的な条件を加えつつ、そのスケッチなどが適切に表現できているかどうかという点にある。あくまでも設計者としての主観的な作業であり客観性からは遠いように思われるかもしれない。しかしやや抽象的なスケッチであっても、一般的な市民である建築主の好き嫌いの意見を把握は出来る。ある習練を経た設計の専門家であれば、スケッチの段階でそのデザインの質についての、専門家としての客観的な詳細な評価は可能である。しかし最終的な客観的な評価は、住宅が完成した後の、住宅のデザインや仕上げなどが具体的な明らかになった後の建築主などの一般的市民の評価であろう⁽¹⁶⁾。市民は、欧米への旅行や様々なテレビ旅行番組などで街並み景観や住宅デザインなどについて、歴史的建築様式などを把握しつつ、主体的な評価軸を持っている場合が多い。日本の建築設計者は、モダニズムに偏した建築教育の影響が大きいために、このような一般市民の志向をほとんど理解できていないという問題点があるのである。

研究を進めるに当たって、先に理論的にはっきりさせておかねばならないことがもう一つある。それは、建築様式の定義である。これが明確でなければ、建築様式からどの様な要素を受け継ぎ発展させるのかが判断できないからである。

井上充夫はその著書「建築史」において、「自然的・社会的条件や材料・工法などに起因…形態上の芸術的な性格の類似…このような建築の集団的な特色を【建築様式】と呼ぶ⁽¹⁷⁾」としている。概括的定義として正しいものであるが、これだけでは建築様式の詳細な分析には不十分である。

次に、前出の「アメリカン・ハウス・スタイル」におけるベーカーの定義に当たってみよう。ベーカーは、アメリカにおいて建築様式についての考え方は非常に混乱しているとしているが、様式についての分析的な記述も行っている。「様式の構成要素は、建築材料、細部、空間の動線の性質から形づくられる質量感、規模、釣り合いおよび特徴によって規定される⁽¹⁸⁾」としている。筆者が必要であると考える様式の詳細な定義に近いものである。

「様式の要素」には明確な建築様式の定義は示されていない。しかし玄関扉から照明器具までのインテリアの挿絵や写真による形態・ディテール・様々な装飾などが、各様式別に極めて

詳細に描き込まれている。このことから、そのような詳細部分の特徴と相互関連性が建築様式であると、編著者に暗黙の了解があるように思われる。

これらの建築様式の定義的な記述をもとに、筆者なりに建築様式の具体的な定義をしてみたい。「建築様式とは、各棟の構成、屋根の勾配や形状・飾り、壁のプロポーシオン、柱の形状や窓の開口の形状や並び方、庇の形状、装飾や彫刻などの壁・床の飾り、仕上げ材や色彩、など全体の形状とディテールが一つのセットとして組み合わされて、美しく安定的な相似の形状を生み出すデザイン的なまとまりをいう。インテリアデザインも外部デザインと同じように様式があり、外部デザインとインテリアデザインは相互に関連して形づくられている。そして現在に世界中に残されている建築や住宅の建築様式として、歴史的に形成され、多くの人々の美的感覚で検証・認知された美しいものが多数存在する」ということになるのではなかろうか。

本研究では、住宅の設計では欠かすことの出来ない外部デザインのあり方を中心に分析と創作法の研究を進めたい。「アメリカン・ハウス・スタイル」にはアーツ&クラフツ様式の分析が欠けている。そして各様式の中に分け入って各要素をどの様に用い発展させていくのかという分析にも欠けているため、そのような方法論も新に考える必要がある。「様式の要素」には前述のようにアーツ&クラフツ様式の項目が取り上げられており、インテリアに関することは微に入り細を穿っている。しかし外部デザインのことは概括的にしか記されていない。

4. 事例に基づく検討

アーツ&クラフツ様式の住宅のモデルとして、以下の住宅と建築家を取り上げる。対象住宅は多数存在するが、筆者から見て魅力的で様式の要素を現代住宅に反映してみたいと思われ、典型デザインとも評価して良い下記の3つを選択した。

- ① KELMSCOTT MANOR 設計：Richard Turner 1570
- ② BLACKWELL HOUSE 設計：M. H. Baillie Scott 1890
- ③ THE HOMESTEAD 設計：C F A VOYSEY 1906

(1) 外部の全体のイメージ

アーツ&クラフツ様式の外部デザインに関する全体的な魅力を把握する。他の様々な建築様式から、この様式が明確にデザイン的に異なるとされる特徴や魅力を、単に浅く真似をするのではなく、総合的に設計に反映させる姿勢で探る。

(1-1) KELMSCOTT MANOR

KELMSCOTT MANOR は建設年代が300年ほど遡る、小規模な貴族の館である。しかしこの館は、アーツ&クラフツのデザインには縁浅からぬものがある。まず第一にアーツ&クラフツ運動の中心メンバーであったウィリアム・モリスが晩年の1871年から他界する1896年までこの館を住まいとしたことである。モリスは自ら計画に関わった新婚時のレッドハウス(設計：



写真2 KELMSCOTT MANOR のファサード



写真3 BLACKWELL HOUSE のファサード

Phillip Webb)をかわきりに様々な住宅に暮らしたが、結局この KELMSCOTT MANOR を一番気に入って、終の棲家にしたのであった。第二には、そのことが示唆するものでもあるが、この住宅のデザインが、アーツ&クラフツ様式の基本的な構成と共通するものが多いということである。

全体の形は、主たる屋根に直交して何カ所も矩勾配⁽¹⁹⁾を越える急勾配の屋根が架けられ、妻壁により塔が並び建つようなイメージを与える。屋根は薄く、壁からの持ち出しはほとんどない。壁はハニー・ストーン⁽²⁰⁾の切石積で、ラフな感じの仕上げとなっている。窓は縦長の形状であり、連窓もあるが縦長のイメージが明確である。しかし窓の面積は大きくなく壁勝ちで、ラフな仕上げの壁の印象が圧倒的に強い。

(1-2) BLACKWELL HOUSE

BLACKWELL HOUSE は、イギリス湖水地方の中心地ボウネスの郊外の丘の上に建つ。マンチェスターの裕福な醸造家の別荘として建てられた。規模が大きくいろいろな部屋があり、建設費も潤沢であったようで、Baillie Scott による様々な造形を見ることができる。建物の外部空間の大きな構成は、KELMSCOTT MANOR に類似である(写真3)。急勾配の主たる屋根から直交した屋根が連続して架けられ、三角形の上部を持つ妻壁が塔状に並んでいる。窓は大きめで連窓となっているが、方立て⁽²¹⁾や無目⁽²²⁾で区切られた各建具は細長い縦長の形状を保っている。障子部分は開くことにより形が崩れる引き違い形式となっておらず、内開き窓である。KELMSCOTT MANOR に較べれば窓面積は大きい、全体としてはラフで迫力のある壁勝ちのデザインである。手前のベイウインドウ上部には大屋根の軒に2階の窓建具の上端が接する形でデザインがなされているが、これはコッツウォルドの民家のデザインと類似である。

(1-3) THE HOMESTEAD

THE HOMESTEAD はロンドンから100km 西の海沿いのまちプリントン・オン・シーに建つ。建築主はゴルフ好きの独身男性であるが、家自体はかなり大きい。写真4⁽²³⁾は、庭からのファサードである。屋根は前の2つの事例と共通で急勾配である。ただし前の2事例では妻壁が立ち上がりケラバ(屋根の妻側の側面)が見えなかったが、この住宅では妻壁が屋根の下面で止まりケラバがくっきりと見える。イギリスの民家のデザインはドイツなどゲルマン系の文化

の流れを汲むが、前の2事例のケラバを見せないディテールは雨の少ない西北ドイツなどの形象を受け継いでいると考えられる。比較的雨量の多いイギリスでは、このディテールでは妻壁が汚れる。この住宅のように少しではあってもケラバの屋根の張り出しが合理的なのかもしれない。薄いケラバであるが黒くくっきりとして印象的である。

この屋根はまた、下がっていった軒に近くなると少し勾配が緩くなり反る形状を取っている。これにより屋根の見え方に安定感を与えているように感じる。窓は縦長で、写真の面では、窓の面積は相当に少なく、ざらざらとした妻壁に圧倒的な存在感がある。下部の円い窓も印象的である。そして窓のまわりは自由な形の砂岩による縁取りがなされ印象的である。妻壁上部の付け庇の棟飾りや、軒先を受けるかのようにデザインされている片持ちの砂岩の壁飾りもある雰囲気を作りだしている。



写真4 THE HOMESTEAD のファサード

(2)ディテール⁽²⁴⁾

(1)の全体のイメージと、この(2)ディテールとは、建築のデザインを具体化する上で最も重要な両輪である。どちらもが優れておりバランスが取れて初めて、総合的に質の高い建築デザインが実現できる。ここではアーツ&クラフツ様式の特徴を示すディテールを取り上げ、後の項で現代住宅のモデルに反映する方法を考える。

(2-1)屋根部分

いずれの建物も屋根は切妻の天然スレート葺きが基本で、シンプルなものであるが、過剰では無い装飾(機能的な意味のあるものもある)が設けられている。写真5は、KELMSCOTT MANORの棟飾りである。この棟飾りにより、シンプルな屋根に上昇感を与えている。和風住宅には同じ位置に鬼瓦があり屋根に風格を与えられていた。世界の歴史的様式にも同じように棟飾りのあるものが多い。しかし現代住宅では、コスト削減とシンプルさの追求からか、このような屋根飾りが用いられる機会は減った。



写真5 棟飾り

写真6は、THE HOMESTEADの大屋根の軒先を支えるための肘木である。やや出が大きい屋根の庇の場合、このような金属製や木製のデザインされた肘木が付けられることが多い。これによりしっかりと軒先を支えるとともに、構造的な安定感を感じさせることが出来る。軒の周辺を美しく飾りたいというデザインの意欲を感じさせる部分である。



写真6 肘木



写真7 大屋根直下の窓



写真8 KELMSCOTTの連窓と石の庇



写真9 同左の妻の庇

(2-2)外壁と窓サッシ

写真7は、BLACKWELL HOUSEの大屋根の軒先と2階窓サッシの取り合い部分の写真である。軒と窓サッシ上部はほとんど接しており、この建物やアーツ&クラフツ様式の住宅の多くの特徴になっている。THE HOMESTEADも同様の軒と窓サッシの構成となっている。このような屋根とサッシが近いスタイルを見慣れると、その他によくある2階窓サッシの上に大きなたれ壁があるデザインが非常に間延びして見えてしまう。

写真7からわかるもう一つの特徴は、窓サッシのまわりに、砂岩のボーダーがはめ込まれていることである。真ん中の方立ても砂岩で出来ており、サッシのフレームはドッシリとした砂岩製で、ガラスのはめ込まれた可動部分の障子は軽快な金属製というデザインになっている。このように窓の金属サッシのまわりに石などでボーダーを設けるというデザインは、アーツ&クラフツ様式の住宅ではかなり一般的なデザインである。

写真8は、KELMSCOTT MANORの窓まわりである。窓は2対1程度の縦長のプロポーションで、内開きの金属の障子には細い格子が入れられている。窓のまわりには壁と同色の磨き仕上げの石のボーダーがめぐらされている。石灰石の乱積では窓サッシとの取り合いの雨仕舞いがうまくいかないため磨き仕上げの石を間にはさんだものと思われる。この磨き石のボーダーは、BLACKWELL HOUSEや次に述べるTHE HOMESTEADのボーダーのように視覚的な効果は少ないが、このような実地的な目的で設けられたためであろう。そして窓の上には石の断面を丸く加工したおかつば頭のような庇が取り付けられている。幾分単調な壁面のデザインに効果的な変化を与えている。

写真9はKELMSCOTT MANORの妻壁上部の窓上の化粧の庇である。平たい形の三角形



写真10 枠取りの四角い窓と左官仕上げの薄い庇



写真11 ボーダーがはめ込まれた丸窓と左官の丸い庇

の両端を裁ち落とした五角形の形状である。機能的に役割を果たしている様子はなく、ややシンプルすぎる妻面の飾りとして付加されているように思える。

写真10・11はTHE HOMESTEADの窓まわりである。

写真10は四角い小さな窓まわりはかなり幅の広い自由な形の砂岩のボーダーを設け、その直上に

厚みの薄い左官仕上げの庇が付けられている。窓の金属製の障子には繊細な格子が組み込まれている。この部分を眺めているだけでもしばらく見飽きない。

写真11は同じ壁面の下部に設けられている丸窓である。丸窓には同様に繊細な格子が入れられ、窓のまわりにはこれも砂岩のボーダーが設けられている。ボーダーの上には窓と同心円の左官の薄い庇が付けられているが、端部は壁の汚れを避けるため少し跳ね上げた水平部分が付く。造形的にもこれで端部の始末がつくという、心憎いデザインである。

写真12は THE HOMESTEAD の妻上部の飾りである。左官仕上げのような薄い庇とそれを支えるような3本の金属棒からなる。機能的な意味はなさそうだが、シンプルで美しく、意味ありげである。

(2-3) インテリア

写真13は BLACKWELL HOUSE の窓際のデザインである。人間の建つ位置をコントロールして室内から格子の窓を通して美しい外部景観に目が行くよう設定してある。

写真14は、THE HOMESTEAD の居間空間である。白いスタッコ仕上げの壁に大きな木製の梁が何本も天井を走る。アルコーブ風の暖炉前の空間は緩いアーチの低い天井の空間になっていてアットホームである。アーチの形象はインテリア開口部の上部にも頻度高く用いられている

写真15は、BLACKWELL HOUSE の2階の主寝室の美しく設えられた内装である。ウインダムニア湖を臨むことが出来る窓際の、人が座る手前に蓮の花のような柱と柱頭がある。この柱と柱頭は構造的には意味を持たないが空間に大きな魅力を与えている。



写真12 庇状の妻飾り



写真13 部屋内から見た窓際



写真14 アーチと化粧梁が美しい



写真15 蓮の花のように美しい造作

(3) 事例に見る特徴を実際の設計に引用してみる

以上のようにスタディしてきたアーツ&クラフツ様式の特徴であると考えられる内容を、実際の住宅設計に引用してみる。

この1年ほどに兵庫県芦屋市で2件の戸建て住宅を設計する機会があり、アーツ&クラフツ

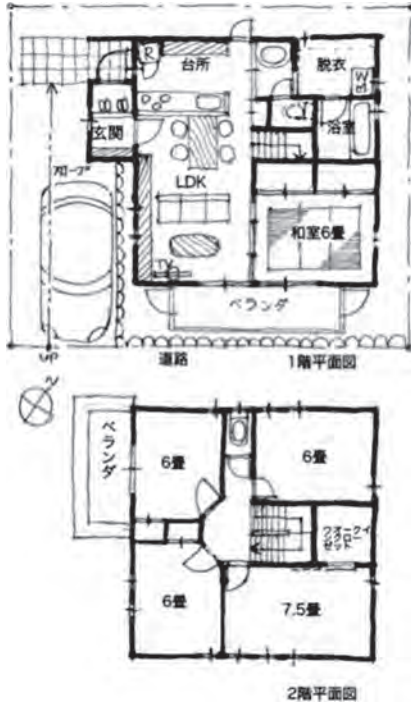


図1 K町の家 1/200



図2 K町の家西面ファサード実施案



図3 K町の家西面ファサード検討案

様式の適用を試みた。いずれも木造2階建てである。春日町の家(以下、K町の家)は、夫婦と子ども2人の核家族の家で、5LDK・約109m²(図1)である。精道町の家(以下、S町の家)は、中高年の親子2人の家であるが将来の売却の可能性も踏まえ4LDK・約104平米(図4)である。

敷地はいずれも100平米を超える程度で、平面計画は敷地の形状で大きく制約を受ける。住み手の住要求と敷地の制約とで、平面計画は概ねが決まってしまうと言って過言ではない。二つの平面計画は、無駄な部分がほとんど無く、非常に合理的な計画になっている。このある意味ではア prioriに定まった建築計画の住宅にどのような魅力的な外観デザインを付与できるかがデザイン上の課題になる。

(3-1) K町の家(2013年7月完成)

同一敷地内には築後23年の、レッチワースの住宅様式や、アーツ&クラフツ様式類似のデザインの母屋が存在しており、バランスの取れた景観を形成する意図から、アーツ&クラフツ類似の建築様式を採用することとなった。

図2は、K町を家の西側ファサードの実施案である。北側斜線(5m+0.6勾配)の制限とコスト面から屋根勾配は6寸にせざるを得ない。しかしその条件で和風でも無様式でもない、アーツ&クラフツ様式のイメージを感じさせるデザインのあり方を追求した。図3は比較検討するために作成した検討案である。

全体の形では、検討案の屋根勾配4/10の形状は、和風のイメージを感じさせる。軒先は、実施案と同じく洋風を感じさせる下端を切り落としたデザインでスケッチしているが、それでも和風のイメージが強い。それに対して実施案の6/10勾配の屋根と軒端があまり出していない(壁芯から鼻先まで303mm)の形状は、明らかに和風とは異なり、アーツ&クラフツ様式の雰囲気を持っている。また破風板先端を水平に切り落とすデザインは、THE HOMESTEADのように屋根下

部を少し折り上げるデザインイメージ(写真4)や、KELMSCOTT MANORの屋根端部の納まり(写真2)を簡易に取り込むねらいを持っているが、それらしい雰囲気になっていると判断できる。なお外壁はアーツ&クラフツ様式の手作りの外壁仕上げに類似のモルタル中塗り仕上げとして、質感を強調している。

実施案の金物による棟飾り(タンポポの形状:子孫繁栄を祈る)と妻壁上部の丸い壁飾り(換気口隠し:太陽の形状で省エネを象徴)は、ファサードに文化情報の厚みを与えている。検討案では装飾は全くなくシンプルなイメージである。しかしその分人々が興味を持って眺めるというような魅力には乏しい。

玄関上部のベランダ手摺り上端の仕舞いであるが、検討案では上部に金属の笠木を被せるのみで外観は四角い単純な形態である。それに対して実施案では、家の顔である玄関を印象的なものにするためベランダ手摺り上部から薄い庇を張り出し、これを肘木で支える形態を取った、これはホームステッドの庇(写真6)や同時代のOtto Wagnerの造形にもつながるもので、落ち着いていながらプレモダンデザインらしい魅力的な造形となっている。

窓については、検討案の窓を引き違いにすれば、簡単に和風調になる。ここでは縦長窓のプ



写真16、K 町の家西面完成写真

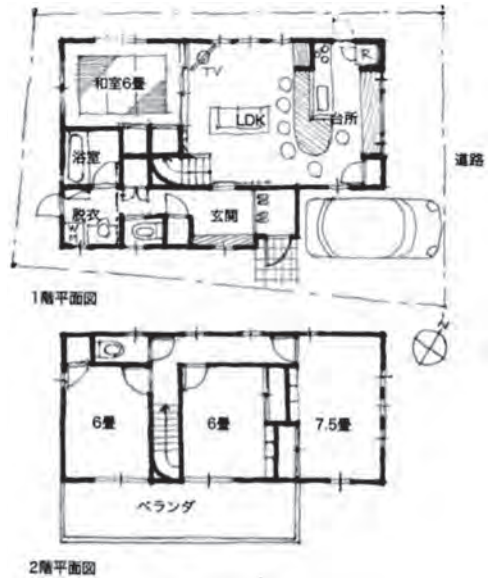


図4 S 町の家 1/200



図5 S 町の家東面
ファサード実施案



図6 S 町の家東面
ファサード1次案



図7 S 町の家東面
ファサード和風案

ロケーションの検討のため検討案でも縦長の窓のスケッチを描いてみた。検討案では幅広(w:600)で縦の長さが短く(h:1200)、格子が入らない形態としている。これに対し、実施案では幅が450と狭く高さが1.500と高い、縦長のものにやや細かめの格子を入れている。縦長のシャープな造形が美しいが、さらにサッシの幅が狭いことで壁勝ちのアーツ&クラフツ様式的なイメージを生み出している。窓の格子も、シンプルな構成の外壁に変化を与え効果的である。玄関部分の十字の格子の付いたはめ殺しの丸窓も、他の開口の四角い形と対照的で、ファサードに魅力を加えている。

検討案もそう悪いことはないが、のっぺりして情報量が乏しく、全体のプロポーションも、実施案に比べ詰めが甘いと感じる。

(3-2) S町の家(2014年2月完成)



写真17 S町の家東面完成写真

この家も、北側斜線の関係で、屋根勾配を大きくしようとしても6/10が限度となる。図7は屋根勾配4/10の和風のファサードである。窓が引き違いであることもあり、アーツ&クラフツ様式とは明確に異なる。真四角のサッシを用いているため、純粹の和風というより、モダニズム系の和風であるということが出来よう。

数回の打ち合わせの後、建て主の好みであるアーツ&クラフツ風のデザインを採用することとなった。道路に面する間口が狭く、ファサードは幅がわずかに4.55mで高さが6~7mとかなり小さいものになる。K町の家と同じようにモルタル中塗り仕上げの外壁仕上げでは、少し表現力の乏しいファサードになると考えられた。そのため2階の窓の腰から下を煉瓦張りとするフランク・ロイド・ライト風のツートーンの外壁デザインとすることにした。下部は煉瓦張り、上部は色モルタルのラフな中塗り仕上げを意図しているが、図6の第1次案がそれである。破風板はK町の家と同じく下端を水平に切断したスタイルに落ち着いた。屋根勾配は6/10でライトの建築の雰囲気はある。しかしこのままではメインファサードとしての魅力が不足していると思われる。そこで2階の3連窓のまわりをTHE HOMESTEADのように煉瓦で枠取りをしてみた。これが図5の実施案である。単純な意匠の追加であるが、アーツ&クラフツ風のイメージを生み出す上でそれなりの効果があると思われる。



写真18 K町の棟飾りと破風飾り



写真19 S町の棟飾りと破風飾り



写真20 K町の縦長窓と庇



写真21 K町の家
玄関上庇の肘木



写真22 K町の家
玄関の丸窓



写真23 S町の家、窓まわりのフレーム

(3-3)ディテール

写真18はK町の家、の金物による棟飾りと妻壁上部の丸い壁飾りである。屋根の上に丸く見えるのはSUS⁽²⁵⁾製タンポポの花の部分で葉や軸の部分は道路からは見えにくい。下の太陽の壁飾りは、SUSのレリーフ状につくられ真ん中の太陽部分は鏡面仕上げとなっており、道路を歩くとまわりの風景を反射して色が変わる。写真19はS町の家、星をかたどった棟飾りで、K町の家と同じ太陽の壁飾りとセットである。これも自然の表象であるが、電力使用を抑えた省エネ住宅の象徴でもある。

写真20はK町の家、の縦長窓とSUS製の庇である。窓の格子はペア硝子の中に仕込まれており、写真の角度ではガラスが反射して見えないが、正面に近い角度になるとその存在がはっきりとわかる。庇は先端に装飾的な丸い開口をあけており、切りっぱなしの四角い庇に較べると見る人の心に留まる。

写真21はK町の家、の玄関庇を支持する木製肘木である。この肘木のためにより多くのスケッチを描いたが、最終的にはこのテーパーを付けたシンプルな形に落ち着いた。

写真22はK町の家、の玄関部分の丸窓である。この窓はコストの関係で建て主から四角い窓で良いとの意見があったが、説得して丸窓のままとしたものである。十字の格子はアーチの形状で立体的にも造形を主張している。

写真23は、S町の家、の道路に面する2階窓の煉瓦による枠取りである。枠取りの中には十字の格子の入った縦長のドレーキップ窓⁽²⁶⁾がはめ込まれているが、それなりに端正なアーツ&クラフツ的な雰囲気が感じられる。窓の真上にはK町の家と同じ丸く円形の穴を飾り切りしたSUS製の庇を取り付けている。

以上のような丁寧にデザインされた細かい装飾は、各々の家のファサードに生き生きとした表情を与えていると判断される。いま建築家の間では主流のモダニズムデザインの住宅は無機的・抽象的な形で装飾がほとんどない。それに較べ、この二つの住宅は基本的スタイルが勾配屋根の住宅らしい形を持っており、それにより住み手に住宅としての安心感を与えることができてきている。それらも相まって、すぐに目に付くところに展開される人々の心につながりやすいシンプルな装飾的要素を持つデザインが、人々に感情移入を誘いかける効果を持っているようである。

ハウスメーカーなどのように需用者の要求を尊重する場合も、モダニズムの影響により装飾



写真24 K町の家造作のアーチ付き柱



写真25 S町の家化粧梁とアーチ開口



写真26 S町の家窓からの緑

がほとんど無いが、あってもその質が低く、十分な達成になっていないように判断される。

写真24はK町を家のLDKの造作のアーチ付きの柱である。階段室の垂れ壁をアーチで切り欠き使いやすいものとしているが、デザイン的にも空間に魅力を加えている。BLACKWELL HOUSEの造作柱に較べシンプルなものであるが、このような意図的な造形が持ち込まれると空間が活性化するようである。

写真25はS町を家のLDKの階段の方向を眺めたものである。階段の踊り場の上には、ここでもアーチに形状を用い垂れ壁をくぐっている。そしてTHE HOMESTEADのような化粧梁が天井を横切り、何となく安心感と魅力を空間に付与している。

写真26はS町を家のLDKから外を眺めたものである。庭先の緑とお向かいの家の緑が重なって見え、この地域らしくない林の中で暮らしているかのような錯覚を与える景観となっている。

(3-4) 居住者などの評価

K町を家の居住者の家族や友人の、この家のデザインに関する評価は、美しく洒落たものだと非常に肯定的である。居住者の友人は少し前に大手ハウスメーカー製の家を建設したが、この家を見て、この家の設計者に頼めば良かったとの感想を述べたとのことである。

S町を家の居住者もこの家のデザインを非常に気に入っており、ご近所の住人も洒落ていると高い評価をしているとのことである。訪れた友人が気持ちが良いと長居をし、帰りたがらないとの意見も示された。

わずか2事例であるが、全体としてこれらの住宅のような洋風の少し洒落たデザイン、アーツ&クラフツ様式を日本型に折衷したようなデザインは、芦屋市の若年層から中高年層の少ない市民に、肯定的に評価されているように判断される。

5. まとめ

建物の全体的な形として、6/10勾配の切妻などの屋根は洋風の住宅のイメージを生み出す上

で効果が高いように思われる。イギリス風の矩勾配(10/10)以上の急な屋根勾配のデザインは、日本にそのまま持ってくれば少し違和感があるようにも感じられる。6/10勾配の屋根を持つ構成を基本にし、そこに建築様式の定義に掲げたアーツ&クラフツ的なデザインの要素を散りばめることにより、日本化したアーツ&クラフツ様式的なデザイン、多くの市民に好まれるハイカラな現代的な住宅デザインが創出できる可能性が、今回の試みで示されたと言えよう。

ただし美しいアーツ&クラフツ的なファサードは、6/10程度の勾配の屋根を持つ壁勝ちの建物に縦長の窓や飾りを用いればアプリオリに成立するものでない。歴史的に形成され、モダニズムにも継承されている美しいプロポーションや窓などの配置、美しくデザインされたシンプルな装飾などを付加するセンスや力量を持って初めて実現できる。このようなセンスやデザインの力量は、いつの時代でも建築家が獲得していなければならない基本的技術・素養であると言えよう。このような素養の獲得が今回の方法論研究の最大の課題であると考えられる。

注

- (1) 竹山清明、「サステイナブルな住宅建築デザイン」148頁、日本経済評論社、2009
Jack I. Nasar、「Evaluative image of the city」SAGE publication、1998
- (2) Ulrich Conrads、「世界建築宣言文集」140～145頁、彰国社、1970
- (3) 「大衆化したモダニズム建築」とはワルター・グロピウスが提唱した国際建築の三原則(陸屋根、平滑な壁、横長の窓)で設計されている我々の身の回りにも普通に存在するビルや住宅を指す。
- (4) アンソニー・M タン、「歴史的都市の破壊と保全・再生」33～34頁、海路書院、2006
- (5) 竹山清明、「サステイナブルな住宅建築デザイン」146～147頁
- (6) 同上148頁
- (7) 同上145頁、158頁
アンケート調査によりアーツ&クラフツ様式は、全10の建築様式のうちで28%と圧倒的な支持を得ている。その他はプレーリー様式20%、ジョージアン様式11%、和洋折衷様式10%と西洋民家様式が約7割の支持で、数寄屋様式が15%の支持となっている。
- (8) 国連のデータを用いたある研究では、日本の戸建て住宅は27年の寿命しかないが、イギリスのそれは200年にわたって使い続けられるとの結果が出ている。日本の家は1世代の短期で消費されてしまうのに対し、イギリスでは約8世代が代替わりして住み続ける。それは、住宅の文化的価値が高く、古いものほど熟成し高く評価され、皆が住みたがるためである。
- (9) 井上書院、1997
- (10) 竹山清明、「サステイナブルな住宅建築デザイン」220頁
- (11) 前面道路から見えるなどの最も重要な建物の外部デザイン
- (12) ジョン・ミルズ・ベーカー、「アメリカン・ハウス・スタイル」140頁、井上書院、1997
JOHN MILNES BAKER、「AMERICAN HOUSE STYLES」W.W.NORTON & COMPANY Inc.1994
- (13) 同上24～33頁
- (14) スティーブン・キャロウエー編、桐敷真次郎監訳、「様式の要素」、同朋舎出版、1994
Stephen Calloway (supervisor)、「THE ELEMENTS OF STYLES」、Mitchel Bleazley Publishers、1991
- (15) 同上306頁～343頁
- (16) 竹山清明、「サステイナブルな住宅建築デザイン」114頁

- (17) 4 頁、理工図書株式会社、1953
- (18) ジョン・ミルズ・ベーカー、「アメリカン・ハウス・スタイル」12頁
- (19) 水平と屋根面の角度が45度の屋根勾配
- (20) コッツウォルド地方特産の蜂蜜色の石灰石。この地方のほとんどの民家の壁はこの石で積まれている。
- (21) 窓サッシの可動部分である障子を区切る縦枠の部材
- (22) 窓サッシの可動部分である障子を区切る横枠の部材
- (23) WENDY HITCHMOUGH、「C F A VOYSEY」166頁、PHAIDON、1995
- (24) モダニズムの代表的な建築家 Mies van der Rohe は「ディテールに神が宿る」と述べてディテールの大切さを主張した。
- (25) ステンレススチールのこと。ここでは18-8ステンレスを用いている。
- (26) ドイツで一般的な気密性の高い内開き窓